

大学 2 年次生のためのキャリア教育としての インタビュー調査の取り組み

澁谷由紀

(神田外語大学)

Interview Research as Career Education for 2nd Year University Students

Yuki Shibuya

(Kanda University of International Studies)

はじめに

近年、キャリア教育の一環として、インターンシップのような直接的な職場の実体験と並んで、社会人のキャリア体験を間接的に経験するインタビュー調査を取り入れた授業が増えつつある(梅崎、2011)。例えば、厚生労働省が大学生対象のキャリア教育指導者用に作成した「大学生のためのキャリア教育プログラム集」(2015)〔厚生労働省委託事業〕では、職業選択や働く難しさ、辛さ、やりがいについて理解を深めるために身近な社会人への職業インタビュー(キャリアインタビュー¹)を通して、仕事について学び、働くことについて考えることが奨励されている。

高等教育機関におけるキャリアインタビューの実践例として、草野(2017)は、キャリアインタビューを経験した学生において、より積極的・主体的なキャリア形成への意識の変化が見られたとしている。また、職業や業務内容、働くことについての理解の深化(高松、2016)、就職活動へのきっかけとしての職業意識の向上(平尾、2005)などの効果も報告されて

¹ 平尾(2005)は、キャリアインタビューとは労務管理において「ある人物のキャリアを聴取して有効な施策へと反映させるための手法」であり、社員一人ひとりの能力を引き出し生産性を高める経営手法であるが、学校教育におけるキャリアインタビューは、学生・生徒の職業意識向上の観点から捉えるべきとしている。

いる。いずれにおいても、キャリアインタビューが少なからず学生のキャリア意識に変化をもたらしたことが指摘されている。

本稿では、神田外語大学(以下、本学とする)国際コミュニケーション学科国際ビジネスキャリア(以下、IBCとする)専攻の2年次必修科目「ビジネスリサーチ I」における、キャリアインタビューを取り入れた質的調査法の授業の取り組みと、履修生がキャリアインタビューから得た学びについて報告する。また、インタビュー調査の実践経験が、同時に履修生の職業選択や職業意識の育成にも貢献する可能性に注目し、キャリア教育の一つの方法としての有効性についても検討する。

1. 「ビジネスリサーチ I」の授業概要

本学 IBC 専攻は、国際ビジネスシーンで活躍する人材の育成を目指すビジネスに特化した専攻であり、英語運用能力の強化と共に、「簿記会計」、「企業インターンシップ」などの特色のある科目が設置されている。本稿で取り上げる「ビジネスリサーチ I(質的調査法の基礎)」(IBC 専攻 2年次前期配当科目)は、多様化する顧客ニーズに対応し、ビジネスの問題の発見と課題解決のヒントを得るために不可欠な質的調査方法の基礎の習得を目標とし、3年次の応用科目である「マーケティングリサーチ」への導入科目と位置づけられる。この科目では、観察調査、面接調査などを用いたいくつかのフィールドワークを実践することを授業課題としている。本稿におけるキャリアインタビューは、面接調査法の課題の一つとして実施したものである。

前述の通り、この科目の本来の目的は、実践を通じた基礎的な質的調査方法の習得であるが、特に、面接調査では、人に話を聞く質問力、聞き取りの内容をまとめる文章力、さらに口頭報告における情報発信力を高めることも期待される。また、調査対象者である仕事の経験を積んだ身近な社会人の働くことに関する具体的な語りを聞くことによって、履修生自身のキャリア形成への意識を高める効果も期待される。

2. インタビュー調査の実践方法

授業課題であるインタビューは、全 15 週の授業のうち、第 10-15 週の 6 コマで実施した。インタビューを実施するために説明用に学生に配布した資料は Table 1 の通りである。例年は、「先輩と仕事」というテーマで、インタビュー対象者は①現在、社会人として働いている(フルタイム勤務、パートタイム勤務は問わない)、②本学教職員、家族・親戚は不可、という条件で自由に選出させている。(「先輩」というのは本学卒業生に限らず、学卒後「仕事をしている人」という定義である。)インタビュー対象者 1 名に対して、履修生 2-3 名一組で対面インタビューを行うことになっている。

インタビューに向けての準備は、履修生が「働くことの意味・やりがい」、「職業選択の基準」、「仕事に必要な能力」など、2-3 人のグループ毎に中心テーマを決め、問題意識や仮説に基づいて質問項目を考え、インタビューガイドを作成する。インタビューの音声は対象者の許可を得て録音し、実施後はグループ内で音声データを共有して分担して文字化し、分析後、結果をまとめて口頭報告を行う。最終報告書は、履修生各自で作成することが課題の一つになっている。報告書の最後に、面接調査から得た気づき、学んだこと、調査方法としての面接について感じたこと等を記すことを求めた。

2017 年度は、例年の実践プロセスとは異なり、本学が創立 30 周年を迎えるにあたり、「神田外語大学 30 周年記念事業」として在校生・大学教職員が卒業生 300 人を訪問しインタビュー調査を行うという「在校生・大学教職員による OB・OG300 人インタビュー」を実施することになり、その一環として、「ビジネスリサーチ I」の履修生が授業課題を兼ねて参加した。

本学キャリア教育センターの協力により、2017 年 6~7 月に、幕張地区・千葉市周辺の企業に勤務する卒業生を中心に、インタビュー対象者を募り 20 名の卒業生からインタビューへの承諾を得た。インタビューの日程、対象者の勤務先企業の事業内容、インタビューが行われた場所については Table 2 の通りである。インタビューの時間は、約 1 時間程度であった。インタビューの一部とインタビュー時の写真は「創立 30 周年記念卒業生メッセージ」として、「神田外語大学創立 30 周年記念サイト」に掲載予定であることを履修生とインタビュー対象者に伝えた。

Table 1 インタビュー調査課題の説明文書

2017BR1 課題③InterviewHO①

**2017Business Research1(Week7) 課題③面接法（インタビュー）実習
(2017.5.26)**

テーマ：「先輩と仕事」

目的：「先輩」→KUISの先輩（KUISの卒業生）「その先輩とその仕事について知りたいこと」をリサーチしてください。（つまり、知りたいことがリサーチ・クエスチョン [リサーチの動機、問題意識] になります。）働くとは？仕事を通じて社会で果たす役割とは？などについて、自分のこととして考えるきっかけとなるようなインタビューを行ってください。

調査実施期間 Week10～11の以下①～③のいずれか1日（1回）

① 6/19（月）18:00～

② 6/23（金）18:00～

③ 6/24（土）13:00～

@キャリア教育センター:2人一組でインタビュー対象者（KUISの卒業生）に1時間程度のインタビューを行う。インタビュー時の写真を撮影する。

Week12～13（6/30、7/7）結果のまとめと報告書の作成

Week14（7/15）～の授業で1グループ10-15分程度の口頭報告をする

Week15（7/22）最終報告書提出

インタビュー調査実習のプロセス

①'（資料・先行文献の収集）

①テーマ（トピック）を決めリサーチ課題（問題関心・仮説）を考える。

②調査計画書を作成する。

③インタビューの承諾をもらい、アポイント（会う約束）をとる。

④話を聞く（できれば録音の許可をもらう）。

⑤データをまとめる（文字起こし）。

⑥データを読み返し、考える。

⑦データから何が言えるのか、どんなことがわかるのかを考える。

⑧発表する（個人情報に注意。出来ればインフォーマントにチェックしてもらう）。

⑨礼状を送る。あるいは研究成果を贈る。

***注意事項**

インタビューの際には、授業で行うリサーチの学習であり、知りえた職場の情報は決して他には漏らさない旨のことを約束して下さい（依頼書・承諾書は発行します）。

3. 本報告における分析方法

本報告は、履修生 51 名分のインタビュー最終報告書のインタビュー分析箇所と自由記述部分を分析対象とした²。分析には、修正版 M-GTA 法(木下、2007)を用いた。データ全体に目を通した後、履修生がインタビューから得た学びの認識を解釈し、取り出したデータを分析ワークシートの「記述例」欄に記載し、「定義」を付け、それを凝縮した「概念名」を生成した(Table 3-1、3-2、3-3)。同時に類似点や相違点を比較しながら概念の範囲を検討するという概念生成を繰り返し、これ以上概念が抽出できない状態になった時点でデータ分析を終了した。最終的に 17 個の概念、5 個のカテゴリーとしてまとめた。履修生全員のデータを見渡すためのケース・マトリックス(Table 4)を作成した。以下、本文中では、カテゴリーを【 】、概念を<>で表している。

Table 2 面接調査日程と場所・対象者の勤務先事業内容

日程	対象者勤務先の事業内容	場所
6/24(土) (1組)		
Group1	国際航空貨物運送業	15:30 キャリア教育センター
6/26(月) (13組) 7/3(4組)		
Group2	車両販売/メンテナンス業	18:20 キャリア教育センター
Group3	場所	18:20 キャリア教育センター
Group4	旅行業	18:20 キャリア教育センター
Group5	不動産管理運営業	18:20にS社〇〇事業部の受付集合
Group6	不動産事業・宿泊旅行関連業	当日18:30 M社フロントに集合当日
Group7	不動産事業・宿泊旅行関連業	当日18:30 M社フロントに集合当日
Group8	通販・ネット販売業	18:20 キャリア教育センター
Group9	一般乗合旅客自動車運送業	18:20 キャリア教育センター
Group10	ソフトウェア・情報処理	18:20 キャリア教育センター
Group11	ソフトウェア・情報処理	18:20 キャリア教育センター
Group12	不動産管理運営業	18:20にS社〇〇事業部の受付集合
Group13	不動産事業・宿泊旅行関連業	当日18:30 M社フロントに集合
Group14	不動産事業・宿泊旅行関連業	当日18:30 M社フロントに集合
6/30(金) (1組)		
Group19	宿泊業	15時にホテルフロント集合
7/3(月)		
Group15	車両販売/メンテナンス業	18:20 キャリア教育センター
Group16	生命保険業	18:20 キャリア教育センター
Group17	研磨材等輸入販売業	17:20 キャリア教育センター
Group18	研磨材等輸入販売業	17:20 キャリア教育センター
Group20	情報・通信機器販売業	18:20 キャリア教育センター
Group1	スポーツチーム運営委託事業	18:20 キャリア教育センター

² 2017年度の履修生は52名であったが最終報告書の提出のあった51名分を分析対象とした。

【1.業界・企業・職種への理解の深化】というカテゴリーは、業種や職種名だけではイメージしにくい仕事内容について、実際に働く人の語りから具体的なイメージを得ることができたということで、その仕事で実際に必要とされる能力とは何かについての【2.仕事で求められるスキル・能力・経験の明確化】、その仕事で求められるどのような能力を学生時代に身につけておけば良いのかについての【3.学生時代にすべきことへの気づき】、その仕事に関わるやりがいや・厳しさの理解についての【4.働くことに対する意識の変化】、さらに、就職活動における職業選択に関わる意識変化についての【5.就職活動への意識の変化】の全てのカテゴリーに影響を与えていると考えられる。

また、【2.仕事で求められるスキル・能力・経験の明確化】は、学生時代に実際に仕事に必要なスキルや能力をどのように身につけ、経験を積みばよいのかという【3.学生時代にすべきことへの気づき】に繋がると推察される。さらに、【3.学生時代にすべきことへの気づき】は、【4.働くことに対する意識の変化】に、【4.働くことに対する意識の変化】は、実際の就職活動における職業選択（【5.就職活動への意識の変化】）に影響を与えると考えられる。以上のカテゴリーと概念の関係を見渡せる図を Figure 1 に示した。

Figure1 インタビュー調査から得た学び

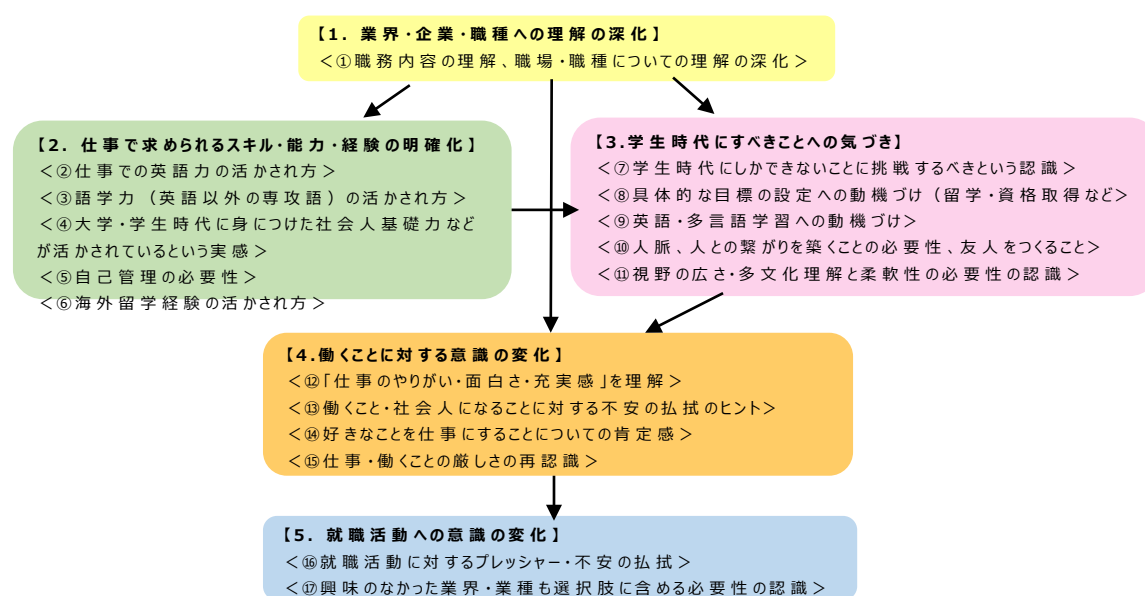


Table 3-1 「キャリアインタビューから得た学び」の категорияと概念

カテゴリー名	概念名	定義	記述例	
1 業界・企業・職種への理解の深化	①職務内容の理解、職場・職種についての理解の深化	インタビュー対象者の勤務先企業の業種・事業内容、職務内容・職場の雰囲気について理解が深まり漠然としたイメージが明確化する	業務内ではF社全てに関わる問い合わせやクレームがカスタマーサービスに集中し、対応するには幅広い知識が必要になる...計り知れない知識が電話対応には必要とされている...日本米軍基地からであったりと本当に幅広い知識と専門用語などを知らないといけない、時間が経つと再認識しました。(S-43)	要望に出来る限り添えられるように様々な意見を提案すること、不快な気持ちにならないように丁寧に説明をすることなど、お客様を第一に考えていることが彼の目を見ていても強く伝わってきた。結果的にお客様の要望に添えることができなくても、対処の仕方だけでなくホテル全体の信用にもつながっているのだと感じた。(S-45)
	②仕事での英語力の活かし方	インタビュー対象者の現在の職務でどのような英語力がどれだけ、どのように活かされているのか、どのような英語力を身につけておくべきかについての理解	仕事の採用資格になっている英語能力は仕事現場ではかなり使用されているようです。海外からの輸入や海外への発注が多いK社では、五分五分で英語と日本語が使用されるくらい英語が使われているようです。また、1つのスキルだけでなく、スピーキング、ライティング、リスニング、リーディングすべてに対応できるスキルが必要です。(S-2)	神田外語の授業では、TOEICの授業を4年次まで履修し、そこで英語力を徹底的に付けた。学生時代は1つ何かを成し遂げることが重要である。Iさんが務めているのは佐倉の倉庫センターで、そこには今まで英語ができる人がいなかったが、外資系の会社ということで英訳和訳を個人的に頼まれるそうだ。その時にそのTOEICの授業が役に立ったなど実感した。(S-5)
	③語学力(英語以外の専攻語)の活かし方	専攻語(英語以外)が現在の職務でどれだけ、どのように活かされているのかについての理解	やはり一番に役立っている事は語学だった。あまり使う機会がないようだが、ざという時に役立っているという事だった。学生時代にしっかりと授業を受けて語学の勉強に取り組んでいたことがわかる。中国人のお客様がほとんどだと言っていたが、積極的に会話をする事は、大学時代に言語を学んでいたからこそだと考えた。(S-3)	語学の勉強をしたことによって、分析力や持久力が身についたという視点が興味深い。社会に出て、彼の専攻語であった韓国語を使うことは全くないと彼は述べていたが、大学で韓国語を勉強したことは決して無駄にはなっていない。コソコソ地味なことをやるのが苦ではないと述べていたり、持久力を身につけることができたと言っていたり、探究心や向上心が強いことがわかった。(S-35)
2. 仕事で求められるスキル・能力・経験の明確化	④大学・学生時代に身につけた社会人基礎力などが活かされているという実感	大学で身につけた能力やスキル(コミュニケーション力、リーダーシップ、情報管理能力、PCスキル、文章力など)やボランティア活動、地域貢献などの経験から学んだことが現在の職務で活かされていることの実感	留学生との交流など積極的に多言語に触れていた事が仕事に繋がっていた...しかし、大学生活で身につけたコミュニケーション能力、人に伝えようとする能力は仕事でも役に立っているそうだ。その能力は外国人相手だけではなく、日本人とコミュニケーションを取る時や物事を伝える時にも役立っているそうだ。(S-14)	外語大学でも就職先が必ずしも語学を使う仕事かどうか分からないけど、コミュニケーションという面ではどの分野でも必ず必要なんだとわかった。お客様だけでなく先輩後輩とのコミュニケーションは自分の仕事のスキルを向上でき効率的に仕事に取り組める。だからと言って、語学の勉強をしなくていいというわけではなく語学を通じて様々な人と交流を持ち様々な人とコミュニケーションをとることで将来働く際にお客様とのコミュニケーションも自然にできるのではないだろうか。(S-27)
	⑤自己管理の必要性	社会人として時間管理、体調管理、ストレス対応、仕事の優先順位、お金の使い方などの自己管理の必要性の認識	業務以外で苦労していることは自分の時間が十分に確保されないということであった。学生に比べると遊ぶ時間や自分の趣味にかけられる時間が減るので仕事以外でも時間管理が大事だと感じているという。このような時間管理の他にも社会人になったら健康管理も重要になってくるのではないかと思った。(S-6)	その時にしなければならぬ仕事は一つに限らないので一つの仕事に、どれくらいの労力をもって接しなければならぬか、という難しさもあるようです。数多く持っている仕事のどれに重点を置いて、優先すべきことの判断などのバランスは間違えると、体調面や、自分だけでなく他の人にまで影響が出て来るので尚更気を使わなければならないことの一つに感じました。(S-24)
	⑥海外留学経験の活かし方	海外留学経験から得た異文化理解力・適応力・多様な視点などが現在の職務でどのように活かされているのか	視野を広く持ち、日本人のお客様だけでなく、外国人観光客の方にも快適に過ごせるサービスを提供することを常に心がけていると感じた。そのホテルには英語圏からではなく東南アジアのお客様も多く訪れるようで独特な英語の発音に苦労しているようだったが、2020年の東京オリンピックに向けて誰もが平等に質の良いサービスを受けられるよう努力する姿がうかがえた。学生時代や留学を通して異文化を理解する力を身につけたことでこのような広い視野をもてるのではと思った。(S-28)	TさんはKUISの学生生活よりも留学で得たことが多くあるようであった。留学時に積極的に自分から行動しないうと相手にしてもらえないことを学び、このことは今の会社でも役立っているようであった。(S-11)

Table 3-2 「キャリアインタビューから得た学び」の категорияと概念

カテゴリー名	概念名	定義	記述例
	⑦ 学生時代にしかできないことに挑戦するべきという認識	インタビュー対象者のアドバイス、後悔したことなどの発話から得た学生時代にしかできないこと・やりたいことに挑戦するべきという認識	学生時代の中で自分はこれだ！というものを見つけていく、それを強みにする事が大切なのだ。時が経つにつれて社会も自分も変化していくのだから、学生時代の今だからこそできること、幅広く様々なことに挑戦し自分のアピールポイントを見つけ出していき事を意識して学生時代を過ごしていこうと感じた。(S-16)
	⑧ 具体的な目標の設定への動機づけ(留学、資格取得など)、漠然としていた目的意識の明確化	具体的な目標の設定への動機づけ(留学、資格取得など)、漠然としていた目的意識の明確化	大学生生活をいかに充実したものに出来るかで将来の自分の可能性が広がっていくかどうかが決まるという事が分かった。そして自由に時間を使える学生である今のうちに、たくさん勉強をして資格などを取り、自分が本当にやりたいことを見つけておくべきだと思った。そのためには、授業を受けられるという貴重な時間を大切にしていけるべきであるとも思った。(S-23)
3. 学生時代にすべきことへの気づき	⑨ 英語・多言語学習への動機づけ	仕事での英語がどのように使われているのか、その重要性を認識したことにより、英語(英語以外の言語)学習への意欲の高まり(SALCの利用など)	「仕事で英語を使う」というのは、スピーキング、ライティング、リーディング、リスニング全ての要素が含まれているため、万遍ない学習が大切である。とりわけビジネスにおける英語では、経済用語やメールの書き方など、ある程度専門性を問われる部分も多く、そういった学習にも力を入れる必要がある...リーディングやライティングに比べて、スピーキングなどは日本人だけでは上達が難しいことがあり、時間のある学生のうちに留学に行く、もしくはKUIS生はSALCで様々な国からやってきた留学生と日常的に会話をするなど、積極的な姿勢で英語の力を伸ばしていくことが理想的であり、またそうしておけばよかったと後悔する人も少なくない。今回インタビューに協力してくださったAさんもその一人である。(S-18)
	⑩ 人脈、人との繋がりを築くことの必要性、友人をつくること	学生時代にさまざまな経験を通じて人間関係を広げること、友人をつくる事が将来的に仕事でも活かされるということ	学生時代に同じ目標に向かって努力を重ねてきた友人や先輩の存在も大きいと語っていた。このことから、仕事の「やりがい」やモチベーションの維持には人との関わりが大きく関係していると結論づけることができるだろう。(S-49)
	⑪ 視野の広さ・多文化理解と柔軟性の必要性の認識	多様な経験を積んで得た視野の広さ、多文化理解力と柔軟性の必要性の認識	就職してからはその業界に関しての勉強だけで手一杯になってしまい、外の業界にはどうしても手を伸ばすことができない。しかし、業務内容によっては他の業界のことも勉強しておく必要が出てきたりして学生のうちに沢山の業界に関心を持っておくことはとても大事ということだった。それと最近ではペット産業(特に猫)がかなり伸びてきており、世界的に規模が大きくなってきている。その業界に関わらず、そういったことがよく起こる今、それに順応する力が必要ということだった。(S-13)
			学生時代でしか得られない経験を何か一つでもいいから打ち込むこと。これがいいに大切なことは彼女の話し方や話している時の表情から伝わってきた。良い思い出になるのはもちろん、自分にとって掛け替えのない経験を得られるのは学生時代ということだ。(S-21)
			大学時代にしておくべきこととして読書と勉強が挙がり、理由としてはどちらも共通して教養を広げ、自身の視野を広くできるという点だった。特に就職してからはその業界に関しての勉強だけで手一杯になってしまい、外の業界にはどうしても手を伸ばすことができない。しかし、業務内容によっては他の業界のことも勉強しておく必要が出てきたりして学生のうちに沢山の業界に関心を持っておくことはとても大事ということだった【中略】今までは読書などもあまりすることはなかったが、少しずつでもいろんなジャンルの本を手にとってみることから始めようと思う。(S-13)
			仕事では学生時代に力を入れていた英語が役に立っているのが4年次まで気を抜かず英語学習に取り組むべきだと感じた。(S-4)
			インタビューを通して、学生➡新入社員➡現在という時系列によって考え方や着眼点がやはり大きく変わっていくのだということがわかりました。しかし、その中で変わらないのは、仕事は人々との繋がりで成り立っているということへの感謝の心でした。Nさんが仕事の話をする時に必ず同僚や当時の先輩、現在の上司の方の話が出て来て、とても楽しそうに話していたのが印象に残っています。(S-24)
			「やれることを全部やること」で、時間に余裕があるからこそ、色んな人に会ったり、色んな人の意見に耳を傾けたりなど「自分の視野を広げることが大事」でそれらを是非行っほしいとのことだ。(S-37)

Table 3-3 「キャリアインタビューから得た学び」の категорияと概念

カテゴリー名	概念名	定義
	㊸「仕事のやりがい・面白さ・充実感」を理解	<p>漠然としていた仕事のやりがい、面白さ、充実感がどのようなものであるのかのイメージが明確化</p> <p>入社して間も無くして、新設された部署を任せられたり、自分の裁量で仕事ができる点は中小企業の魅力であるようだ。人の役に立つことができ、人に感謝されることは、仕事をする上でやりがいと直結するという。また、お客様や上司の方と話す機会も当然多くなるようだが、自分に責任があるからこそ、仕事に誇りを持って働けるということが、楽しそうに話すDさんを見てよくわかった。(S-29)</p>
	㊹働くこと・社会人になることに対する不安の払拭のヒント	<p>仕事=辛いもの、と考えてきたようで、最初は嫌なことも多かったそうだが、ある経験を通して、周りの人に褒めてもらえたことから、周りが見えてくる、評価してくれる、仕事=辛いものという考えは払拭されたようです。また、少しずつやれることが増えているからか、最近では楽しんで仕事ができているのではないかと彼女の表情から感じた。今迄、仕事=辛いものという考え方が少し払拭されて、将来への不安が少し減りました。(S-12)</p>
	㊺好きなことを仕事にすることに対する肯定感の高まり	<p>好きなことを仕事にしたことにより第一志望の会社でなくても自らの向上心を高めるような仕事ができている。好きなことを仕事にすることは同じ仕事を継続するという意味で大切</p>
	㊻「営業という仕事、そして自分が売っている商品に誇りを持っているということが分かる。また、営業という仕事を通して人と人の関わり、つまりお客様との関わりを大事にしており、お客様と強い信頼関係を築いていることも、彼の仕事に対するモチベーションに繋がっているのではないかと考える。この時の彼の表情からも、今の仕事を心から誇りに思っていて、仕事が好きだということが分かった。(S-19)	<p>営業という仕事、そして自分が売っている商品に誇りを持っているということが分かる。また、営業という仕事を通して人と人の関わり、つまりお客様との関わりを大事にしており、お客様と強い信頼関係を築いていることも、彼の仕事に対するモチベーションに繋がっているのではないかと考える。この時の彼の表情からも、今の仕事を心から誇りに思っていて、仕事が好きだということが分かった。(S-19)</p>
	㊼社会に出る前と出た後で、働くことへのイメージが大きく変わるが、それを悲観的にとらえるのではなく上昇思考と感謝の心を常に意識することで自分の将来も目標を持って進むことができるようです。(S-24)	<p>社会に出る前と出た後で、働くことへのイメージが大きく変わるが、それを悲観的にとらえるのではなく上昇思考と感謝の心を常に意識することで自分の将来も目標を持って進むことができるようです。(S-24)</p>

Table4 インタビュー調査から学んだこと(ケース・マトリックス)

No. カテゴリ名	キャリアインタビューを行った履修生(51名)																																																								
概念名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51						
1. 業界・業種・職種への理解の深化																																																									
①職務内容の理解、職場・職種について理解の深化	○	○		○	○	○				○		○	○	○		○	○		○		○		○	○	○	○	○	○		○		○		○		○		○	○	○	○	○	○	○		○		○									
2. 仕事で求められるスキル・能力・経験の明確化																																																									
②仕事での英語力の活かされ方		○	○	○					○								○	○			○		○	○	○	○	○												○			○															
③語学力(英語以外の専攻語)の活かされ方			○	○																																																					
④大学・学生時代に身につけた社会人基礎力などが活かされているという実感				○					○			○	○																																												
⑤自己管理の必要性	○						○																																																		
⑥海外留学経験の活かされ方												○						○																																							
3. 学生時代にすべきことへの気づき																																																									
⑦学生時代にしかできないことに挑戦するべきという認識	○	○	○	○	○					○			○	○																																											
⑧具体的な目標の設定への動機づけ(留学、資格取得など)									○				○	○	○	○																																									
⑨英語・多言語学習への動機づけ		○	○	○																																																					
⑩人脈・人との繋がりを築くことの必要性、友人をつくること			○																																																						
⑪視野の広さ・多文化理解と柔軟性の必要性の認識									○																																																
4. 働くことに対する意識の変化																																																									
⑫「仕事のやりがい・面白さ・充実感」を理解																																																									
⑬働くこと・社会人になることに対する不安の払拭のヒント																																																									
⑭好きなことを仕事にすることについての肯定感																																																									
⑮仕事・働くことの厳しさの再認識																																																									
5. 就職活動への意識の変化																																																									
⑯就職活動に対するプレッシャー・不安の払拭																																																									
⑰興味のない業界・業種も選択肢に含める必要性の認識	○																																																								

4. 結果:キャリアインタビューの実践が履修生のキャリア意識に与えた変化

修正版 M-GTA によるキャリアインタビューからの学びについての質的データ分析の結果と考察は以下の通りである。

【1.業界・企業・職種への理解の深化】

このカテゴリーに含まれる<①職務内容の理解、職場・職種についての理解の深化>では、インタビュー対象者の勤務先での仕事内容を具体的に語りによって知ること、インターネット上の企業のHPや会社説明会では知ることのできない企業や仕事のイメージが明確化したことが窺える。例えば、国際航空貨物運送業務における顧客への電話対応について、「全てに関わる問い合わせやクレームがカスタマーサービスに集中し、例えば、日本米軍基地からであったり対応するのに幅広い知識と専門用語などを知らないといけない、そのような知識を身につけるには時間がかかることを再認識した」ということ、あるいは、ホテルのフロント業務では、「周囲の地形やお店のリサーチ等も行わなければならないことなど接客の業務内容の広さに驚いた」ことなど、また、「営業職」などのように抽象的で大学生が理解しづらい職業について、具体的なイメージを描くことができたという報告もあった。

【2.仕事で求められるスキル・能力・経験の明確化】

このカテゴリーは、<②仕事での英語力の活かされ方>、<③仕事での語学力(英語以外の専攻語)の活かされ方>、<④大学・学生時代に身につけた社会人基礎力などが活かされているという実感>、<⑤自己管理の必要性>、<⑥海外留学経験の活かされ方>という5個の概念から形成される。

外語大生にとって、学んでいる言語が将来的に仕事でどのように活かされるのかは重要な関心事である。「英語の読み書き、特にビジネスの英語の授業が非常に役立っていることが分かる」、「海外からの輸入や海外への発注が多く、英語と日本語が五分五分で使われている」、「一つのスキ

ルではなく、4 技能全てに対応できるスキルが求められている」のように、
②仕事での英語力の活かされ方>は、実際の業務でどのような英語力が
どれだけ、どのように活かされているのかを具体的に知ることであり、自分
が将来就きたい職業にはどのような英語が必要なのかを考えるきっかけに
もなる。さらに、英語が使えると確かに仕事に有利であるが、一方で、「英
語だけでできる仕事は殆どない」こと、「職種によって求められる英語力は
さまざまである」ことなどを認識したという記述もあった。

<③仕事での語学力(英語以外の専攻語)の活かされ方>については、
「現業務ではあまり使う機会がないようだが、いざという時に(中国語で)積
極的に会話することができ役立っている」、「語学そのものよりも、語学の
勉強をしたことによって、分析力や持久力が身についた」など、仕事で直
接的にその言語を使用する機会は少なくとも、英語に加えて英語以外の
言語を学んだ経験は、コミュニケーション力含む、社会人基礎力を高める
ことにも繋がるということであろう。「大学での専攻語はあくまで専攻語であ
り、必ず仕事にしなければならないということではなく、就職時に重点を置
きすぎるのも視野を狭める」という意見もあった。

語学以外に大学で身につけた能力・スキルが仕事でどのように活かさ
れているか<④大学・学生時代に身につけた社会人基礎力などが活かさ
れているという実感>の能力・スキルは、コミュニケーション力、リーダーシ
ップ、情報管理、PC スキル、文章力、ボランティア活動、地域貢献など多
岐にわたっていた。中でも、新卒採用で多くの企業が重視する「コミュニケ
ーション能力」への言及は多い。「大学時代に留学生と交流したり、英語
やスペイン語を学んでいた為、理解できない知らない言葉で話しかけられ
ても動揺しない」、「外語大学でも就職先が必ずしも語学を使う仕事かどう
かわからないが、コミュニケーションという面ではどの分野でも必ず必要で
ある」、「語学を通じて様々な人と交流を持ち様々な人とコミュニケーション
をとることで将来働く際にお客様とのコミュニケーションも自然にできる」の
ような語りから、「言語はコミュニケーションのツール」と認識しているよう
である。大学の授業での議論やプレゼンテーション、あるいはゼミや実習など
少人数での活動、あるいは、サークルやボランティアなどの課外活動によ

って、コミュニケーション力が確実に養成されて、それが仕事に活かされていることをインタビュー対象者の経験から実感したことが記されている。

＜⑤自己管理の必要性＞では、社会人と学生との大きなちがいとして、特に「自分の時間が十分に確保されない」、「学生に比べると遊ぶ時間や自分の趣味にかけられる時間が減るので仕事以外でも時間管理が大事」だと感じているなど、社会人としての時間管理、体調管理、ストレス対応、お金の使い方などの自己管理の必要性について改めて認識したことがわかる。

＜⑥海外留学経験の活かされ方＞については、「留学を通して、英語を話す、聞く能力だけを身につけたのではなく、異文化を理解する力や、外国人のお客様の心に寄り添う力を身につけたのではと思った」のように、留学＝英語力ということではなく、海外留学経験によって身につく異文化理解力・適応力、多様な文化背景の人々と接することができる柔軟性など、広い意味でのコミュニケーション力が活かされていることを認識したことがわかる。

【3. 学生時代にすべきことへの気づき】

このカテゴリーは、インタビューから得た学生時代にすべきことへの気づきについての＜⑦学生時代にしかできないことに挑戦するべきという認識＞、＜⑧具体的な目標の設定への動機づけ(留学、資格取得など)＞、＜⑨英語・多言語学習への動機づけ＞、＜⑩人脈・人との繋がりを築くことの必要性、友人をつくること＞、＜⑪視野の広さ・多文化理解と柔軟性の必要性の認識＞という5個の概念から成る。

＜⑦学生時代にしかできないことに挑戦するべきという認識＞は、社会人になると、時間的なことを理由にして、新しいことにチャレンジするのを躊躇するので、学生時代のうちにいろいろなことにチャレンジして挫折や失敗も含めて経験しておくことが大事であることに多くの履修生が同意していた。時間に比較的余裕のある大学生のうちに様々なことにチャレンジすることで自分の可能性が広がるということである。一回限りのインタビュー経験では「学生のうちに何でもいいからとにかくやりたいことをやる」という

認識レベルに留まり、具体的な目標設定に至るのはむずかしいかもしれない。しかし、留学、資格取得、読書、などの具体的な行動レベルについて記述しているケースもいくつか見られた(<⑧具体的な目標の設定への動機づけ(留学、資格取得など)>)。

言語学習への意欲(<⑨英語・多言語学習への動機づけ>)は、仕事で使われている英語・多言語がどのようなものであるのか、イメージを掴んだと思われる履修生からは、残りの学生生活でどのように学んでいくのか、学内の学習施設の利用や留学生との交流を積極的に行うこと、World Englishes を意識した英語学習など、言語学習における具体的な目標設定の記述があった。

<⑩人脈・人との繋がりを築くことの必要性、友人をつくること>では、「仕事は人と人とのつながりで成り立っている」、「仕事のやりがいやモチベーションの維持には人との関わりが大きく関係している」など、社会に出てからこそ重要性が増す人間関係があることへの気づきがあり、親友と呼べる仲間との出会い、アルバイト経験を通じた人との繋がりなどは学生時代にしか築くことのできない人間関係であり、社会に出てから仕事に間接的に活かされることを実感したことが窺える。

<⑪視野の広さ・多文化理解と柔軟性の必要性の認識>は、仕事で、特に海外との業務を通じて、日本とは違う文化、価値観を持つ人たちと仕事をしていくことのむずかしさを感じたという経験談から、留学などを通して海外経験を積んで、異なった視点で物事を見ることが出来る広い視野を養っておくことが必要であるという気づきである。広い視野は、必ずしも留学経験からのみ得られるということではなく、社会全般について関心を持つことの必要性、例えば「その業界に関しての勉強だけで手いっぱいになってしまうが、業務内容によっては他の業界のことも勉強する必要がある、学生のうちに広く関心を持っておくことも必要である」という認識もあった。

【4.働くことに対する意識の変化】

このカテゴリーは、社会人として働くことの意義や意味、働き方に関わる意識の変化について<⑫「仕事のやりがい・面白さ・充実感」を理解>、

＜⑬働くこと・社会人になることに対する不安の払拭のヒント＞、＜⑭好きなことを仕事にすることについての肯定感＞、＜⑮仕事・働くことの厳しさの再認識＞の4個の概念から成る。

＜⑫「仕事のやりがい・面白さ・充実感」を理解＞は、その人なりの仕事への向き合い方、こだわり、思い入れなどの語りを聞くことによって、仕事に対する前向きな取り組み方のイメージが明確化したことがわかる。「営業は男性が行う仕事である、という一般的な考えにとらわれず、自分なりの仕事の仕方、自分だからできる仕事、営業での女性ならではの細かい気遣いなど、仕事に工夫を加えている事がわかった。人から感謝されたり、感動を与える仕事は余計に工夫やちょっとした気遣いが大事であるがそれと同時にそれはやりがいにも繋がる」のような記述があった。他にも「自分の裁量で仕事ができるという責任」、「人の役に立つことができ、人に感謝されるという認識」、「お客様の喜びや笑顔」など、それぞれの仕事において「やりがい」は異なるが、それらに共通しているのは、自分の仕事が社会の中でどう活かされ、どんな評価を得て、それによって何を得て、将来のどんなキャリアに繋がっていくかについて理解できたということであろう。

＜⑬働くこと・社会人になることに対する不安の払拭のヒント＞については、「最初は大変だし、今も苦労は絶えないが、やれる仕事は増えてきてそれを周りは評価してくれるし、当初の目的である人の役に立つことができているので、そんなに仕事って辛いものじゃない」、「社会人の生活は自分の時間が無くてただただ仕事をする。というような大変な日々だけが待っていると思っていたけど、お話を聞いているとAさんの場合ですが、自分の仕事に誇りを持っていて仕事の話をしている時のAさんは輝いていました」のような記述があった。自分自身の将来のイメージを描き易い同じ大学の「卒業生」と話して、働くということに様々な捉え方があること、経験とキャリアを重ねることによって進むべき道が見えやすくなることなど、漠然とした不安が少し和らいだことがわかる。

＜⑭好きなことを仕事にすることについての肯定感＞は、キャリア選択に関して、繰り返し議論されていることであるが、学生のうちは「仕事は辛いもの、でも、好きなことなら頑張って続けられる」と考える傾向が強い。

「合わないと思ったら就職してすぐでも、自分の好きな職業をやるべきだと思いました。Nさんも、一度は違う業界に行ったけれど、改めて旅行業界に戻り、そこで経験を積んでお客様への対応だったり、資格をとったり、多くの知識を身につけたり、やはり自分の好きなことでないと頑張ろうと思えないし、より良いサービスを提供出来ないと思いました」、「好きなことを仕事にしたことによって第一志望の会社でなくても自らの向上心を高めるような仕事ができている。好きなことを仕事にするというのは同じ仕事を継続するという意味で大切だなと思った」のように、好きなことを仕事にすることについての肯定的な意見が目立った。しかし、「好きなことだけをする仕事」は現実には存在せず、現在の仕事でやりがいを感じている人、楽しそうに仕事をしている人が皆、最初から好きな仕事に就いたわけではないことには気づきにくい。キャリアインタビューは、その仕事で経験とキャリアを重ねることによって少しずつ「自分が理想とする好きな仕事」に近づいていくというプロセスがあることを知る機会になるのかもしれない。

<⑮仕事・働くことの厳しさの再認識>は、「人間関係では苦勞していることが多くストレスになっている」、「顧客や取引先からのクレーム対応によるストレス」、「他部署の対応の不手際やクレームの処理」のように、社会に出て働くことの厳しさについて、仕事に厳しさがあるのは当然だが、学生とはちがう責任の取り方、責任感や仕事の重さなど、お金をもらうからこそその経験談から「厳しさを」改めて感じたことが窺える。

【5. 就職活動への意識の変化】

このカテゴリーには、<⑯就職活動に対するプレッシャー・不安の払拭>、<⑰興味のなかった業界・業種も選択肢に含める必要性の認識>の2つの概念が含まれる。

<⑯就職活動に対するプレッシャー・不安の払拭>は、就職活動スケジュールや心構えについて具体的なアドバイスを得ることができ、漠然とした不安が和らいだということである。「就活前にやりたいことを見失うと仰っていた部分は、当時の気持ちを赤裸々に話してくださり、私達自らの経験に落とし込むことができた気がした」のように、就職活動に対する思い込み

やインターネット上の情報による不安感、つい最近まで自分と同じ大学の学生だった先輩の話聞くことで、多少和らいだということが窺える。

インタビューから得た就職活動における実践的なアドバイスとしては、例えば、「自分に興味のない企業の説明会でも行ってみるだけ行ってみると、案外自分にあった仕事を見つけられたり、新しい発見があるそう。自分が今度就活をしていく時に参考にしたい。自分自身の就活を考える際、今まで『外資系企業』など全然考えていなかったが、今回のインタビューで『外資系企業』も一つの選択肢として考えてみるきっかけとなった」のように、＜⑩興味なかった業界・業種も選択肢に含める必要性の認識＞についての記述があった。自ら対象者を自由に選ぶインタビューではなく、予め決められていた対象者から話を聞くことが、それまで興味なかった業界、業種、職種への関心の拡大のきっかけとなり、職業選択の幅を広げて考えることに繋がったケースもあった。

まとめと今後の課題

本稿は、本学2年次生を対象とした「ビジネスリサーチ I」の授業課題としてのインタビュー調査（キャリアインタビュー）の取り組みの報告と、履修生がインタビュー調査からどのような学びを得て、職業選択や就業意識にどのような影響をもたらしているのかについて、履修生の最終報告書の記述を基に考察した。

授業課題の目的は、「先輩の仕事をレポートする」ことではなく、インタビューを通じて「自分自身のキャリアを考える」ということで、全体的にはこの目的は達成され、履修生のキャリア意識に何らかの変化をもたらし、キャリア教育の一手法としての有効性が確認されたと考えられる。

履修生にとって、同じ外語大学の卒業生にインタビューすることによるメリットのいくつかが明らかになった。学生にとって、大学で学んでいることがどう活かされるかは、わからない部分が多いであろう。特に、学んだ外国語がどう活かされているのか、同じ大学を卒業した身近な社会人の経験からは、自分の将来のイメージが描きやすい。言語を学んでも、現在の仕事に直接的に活かされるケースは限られることも少なくないが、言語を学ぶこと

は、例えば、コミュニケーション能力、積極性、継続する力を養成することであり、異文化に対する理解力や適応力、柔軟性が培われるということもわかったであろう。大学で、自分の専攻語の知識を積み上げていけば、どのような仕事に就いたとしても、何かの形で生きてくることがあり、さらに、仕事で積み上げた知識や経験が、やりがいに繋がり、自分を成長させることになる気づいたかもしれない。日々の大学生活でこのようなことを考える機会は少ないが、キャリアインタビューが長期的な視点で将来を考えるきっかけになると考えられる。

高松(2016)は、インタビュー対象者として「学生が興味のある職業であればあるほど、その職業を目指すために学生時代にしなければならないことが明確になり、具体的な自身のキャリアを考えることができる…将来のビジョンが定まっている学生にとってはそのビジョンに近い職業に就いている社会人にキャリアインタビューを実施すべき」(p.204)としている。しかし、大学2年次生で明確なキャリアビジョンを描ける学生は殆どいないであろう。今回の調査課題では、自ら選んだ対象者でない、つまり、将来のビジョンに沿った職業に就いている社会人が対象ではなかったが、それが職業選択の幅を広げることに繋がるというメリットになることもわかった。

キャリアインタビューが、残りの学生生活ですべきこと、あるいは2年次以降の学生生活をどう過ごすかについて、働くということに対して、前向きに考えるようになるという効果はある程度期待できるかもしれない。しかし、言語学習への意欲、働くことへのモチベーションの向上などは、あくまでも心理的な側面への影響であり、行動を促す動機づけとしての働きかけに留まるケースが殆どであろう。学生が実際に就職活動を行い、進路を決定し、生涯にわたるキャリア形成のための力つけるのがキャリア教育であるとするならば、キャリアインタビューでどのように行動面での変化が起きたのか、本報告が示唆することをさらに掘り下げるための経年変化を把握することが求められる。

参考文献

- 梅崎修(2011)「オーラルヒストリーを使った教育実践「森の“聞き書き甲子園”」の活動」生涯教育とキャリアデザイン 8 巻、97-107. 法政大学キャリアデザイン学会
- 木下康仁 2007 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂
- 草野美智子(2018)「アクティブ・ラーニング型授業の一手法としてのキャリアインタビュー」熊本高等専門学校 研究紀要、9 巻 1 号、13-18. 独立行政法人国立高等専門学校機構 熊本高等専門学校
- 高松直紀(2016)「キャリアインタビューの取り組みと展望—大阪樟蔭女子大学におけるキャリア教育の一事例から—」大阪樟蔭女子大学研究紀要 6 巻、199-204.
- 平尾元彦(2005)「キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー」大学教育 2、85-94. 山口大学大学教育機構
- 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング(厚生労働省委託)「大学生のためのキャリア教育プログラム集」、21、26-29、平成 27 年 3 月
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11800000-Shokugyounouryokukaihatsukyoku/0000092897.pdf> (閲覧日 2019 年 7 月 6 日)